2013 年 7 月 18 日放送

「第６４回日本皮膚科学会西部支部学術大会①　大会を終えて」

広島大学大学院　皮膚科
教授　秀　道広

はじめに

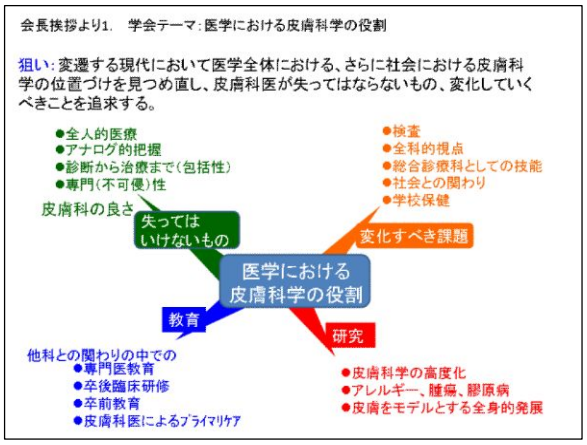
平成 24 年 10 月 27 日から 28 日、広島市中区の広島国際会議場にて、第 64 回日本皮膚科学会西部学術大会を開催しました。当日は晴天に恵まれ、西部支部はもとより全国から多くの方々にお集まりいただき、この場を借りてお礼申し上げます。

広島大学皮膚科学教室は、昭和 22 年（1947 年）広島県立医専に設置された皮膚泌尿器科学教室を源流とし、昭和 40 年（1965 年）矢村卓三教授を初代とする皮膚科学教室となって現在に至っています。西部支部総会としては、22 年ぶりの開催です。

矢村教授は蕁麻疹・アトピー性皮膚炎に関する研究を開始され、皮膚科学教室となって 2 代目の山本昇壯教授は、その流れを、マスト細胞を基軸とした基礎的研究に展開し、アトピー性皮膚炎治療ガイドラインや学校保健といった社会との関わりにも拡大されました。3 代目の秀は、皮膚アレルギー、膠原病の他、重症熱傷、皮膚悪性腫瘍、実地医療との関わりも大切にしています。

今回の学会で求めたことは、医学全体、さらに社会における皮膚科学の位置づけを見つめ直し、皮膚科医が失ってはならないものと、変化していくべきことの追求です。

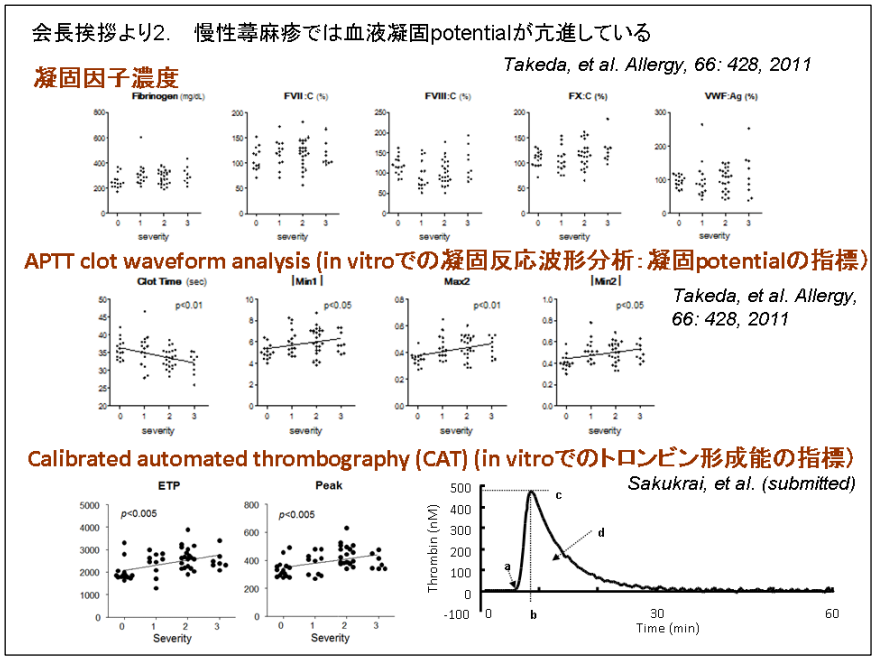
学会テーマ：医学における皮膚科学の役割



現代社会はグローバル化の波とともに医学も急速に発達し、次々と新しい領域が生まれています。その中で、皮膚科医はその診療の特殊性と重要性を訴えるだけでは、早晩時代遅れの狭い分野へと転落していくことは間違いありません。一方、だからといって新しいものを追い求めているだけでは、時代の先頭を走る、名誉ある集団となる

ことはできません。本学会のテーマ、「医学における皮膚科学の役割」とは、そのような変化の時代にあって、皮膚科医が誇りを持って活躍する将来を願って設定したものです。このテーマは、研究、教育、変化すべき課題、および失ってはいけないもの、の 4 つの視点により展開されました。以下、各視点から学会を紹介します。

研究



まず、研究について本学会で追求したことは、アレルギー、腫瘍、膠原病の各領域における皮膚科学研究の高度化と、皮膚をモデルとする全身的な発展につながる研究の紹介です。アレルギーについては、会長挨拶で、教室で取り組んでいる蕁麻疹とアトピー性皮膚炎の共通点と相違点にかかわる研究を紹介させていただくとともに、島根大学の森田栄伸先生にアレルギー性の蕁麻疹について講演いただきました。膠原病については、聖マリアンナ医科大学の川上民祐先生に「皮膚科医が診る血管炎の見方」について教育講演を頂き、腫瘍では、シンポジウムを組んでこの領域における最先端の話題を追求しました。皮膚科医として活躍中の 3 人の先生に加え、東京医科歯科大学生体材料工学研究所の安田賢二教授には、ナノテクノロジーを駆使したがん診断の研究を、獨協医大放射線治療センターの村上昌雄教授には重粒子線治療について講演いただきました。私が中でもこだわったのは、慶応大学の天谷雅行先生の特別講演で、「生命の境界で何が起きているか？皮膚科学からの挑戦」と題し、文字通り医学全体に発信する挑戦的研究の最新情報をお話しいただきました。天谷先生は、この講演の後まもなく、日本医学界で最も権威ある賞のひとつであるベルツ賞を受賞され、その業績は広く国民の知るところとなりました。

学術文化講演にお招きした福岡伸一先生は、「動的平衡」、「生物と無生物のあいだ」などの著書で有名で、サントリー学芸賞、中央公論新書大賞の受賞でも知られています。福岡先生が講演された「かたちとその奥にある理念」という概念は、皮膚科学という学問と深くつながり、医学全体における皮膚科学の役割を考えるために、期待通りの示唆を与えて下さいました。

海外からの講師は 2 人で、一人は皮膚治療学で最もホットな乾癬の生物学的治療薬のエキスパートである英国マンチェスター大学の Christopher Griffiths 教授に、そしてもう一人は自然免疫で膨大な研究成果を重ねつつあるスタンフォード大学の Richard Gallo 教授に、それぞれ最新の研究成果を講演していただきました。

教育

教育については、卒前教育、卒後臨床教育、専門医教育、そして皮膚科医によるプライマリケアにおける課題がありますが、これらは、学術大会を通して追求されるべき内容でもあります。中でも、皮膚科医が他科と関わり、さらにはこれまでの皮膚科の守備範囲を超えて活躍する場を広げていくべく、シンポジウム 2「チーム医療の将来と皮膚科医の役割」を設定し、関西医科大学医学教育センターの河本慶子先生に「卒後研修における皮膚科医の役割」について講演いただきました。河本先生は、皮膚科医として専門医の認定を受けた後スタンフォード大学で医学教育について学び、現在我が国の臨床教育指導者育成のためにご活躍中です。また、皮膚病理は、皮膚科医にとって極めて重要な診療技能ですので、一部の志高い人々のみの専門領域とならないよう、総合受付の向かい側に標本を配置し、参加者がより気軽に標本を観察できるように工夫しました。

受付向いに設定されたCPC標本と顕微鏡

変化すべき課題

3 つめの「変化すべき課題」としては、数ある課題の中から特に、「検査」、「全科的視点」、「総合診療科としての技能」、「社会との関わり」、「学校保健」を取り上げました。

皮膚科は、皮膚を目で見て診断することを基本とし、またそのことで絶大な力を発揮できるが故に、他科に比べて機器を使った検査の発達が乏しいところがあります。そこでシンポジウムでは、悪性腫瘍の診断に関する先進的検査法の講演をいただくとともに、近未来を開く期待が持たれる表面プラズモン共鳴センサーによる診断の可能性について、教室より発表させていただきました。シンポジウム 3「皮膚科医の診断力と工夫」でも、皮膚科診療における機器を使った検査の拡大について追求しました。

全科的視点では、シンポジウム 1 および 2 で皮膚科から他科への発信、応用が期待される話題を、シンポジウム 3 で皮膚科医自身がプライマリケアを担当すべき他科との連携、ならびに診療能力の課題について議論し、教育講演 3、4 で、今後皮膚科医が取り組むべき臨床疫学の手法、皮膚科と社会の関わり、学校保健についてお話しいただきました。シンポジウム 3 での東日本大震災における皮膚科の先生方の活動報告もまた、インパクトのある内容となりました。

失ってはいけないもの

最後の、皮膚科が「失ってはいけないもの」については、全人的医療、アナログ的把握、診断から治療までの包括性、そして専門科としての不可侵領域が大切と考えました。これらの点については、150 を超える一般演題を登録いただいたすべての先生方とともに作り上げることができたと思いますが、学会プログラムとしては、CPC の重点的配置とともに、皮膚科医の診断力と工夫をテーマにしたシンポジウム 3 を企画し、皮膚科ならではの技術と工夫を追求しました。

懇親会・アトラクションなど

学術以外のプログラムとしては、学会 1 日目の夕方に、広島の繁華街の外れに位置する ANA クラウンプラザホテルにて懇親会を行いました。懇親会の始めには、小学生で結成された広島ジュニアマリンバアンサンブルの演奏をお聴きいただきました。小学生のクラブとはいえ、カーネギーホールでの演奏も経験した凄腕で、また、会場の中にも入ってくる愛くるしさ満点で、ご参加いただいた皆様からは大変好評でした。その後の食事と懇親では、用意した広島の地酒はすっかり売り切れ、皆様とともに楽しいひとときを過ごすことが出来ました。

学会 2 日目の午後は、会場に隣接する本川対岸に位置する中国新聞ホールで、市民公開講座「よくある皮膚病とその対処法」を開催しました。

おわりに

学会は、このように充実した内容に、たくさんの参加者をいただいて、大変盛況のうちに終了することができました。広島では 22 年ぶりという西部支部総会で、事務局を担当した広島大学皮膚科の一同は大変緊張して当日を迎えましたが、ご参加いただいた皆さんからいただいたお褒めや喜びのことばは何よりの慰労となりました。学会を講師、演者として盛り上げてくださった先生方、そして事務局ならびに事務局を支えてくださった教室員、同門会等の先生方に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

学会を支えた教室スタッフ